2020～
2021

さあ、つながろう！

～私たちは浜松子ども支援 NET です～

構成団体

・アクティブ

・NPO 法人遠州精神保健福祉をすすめる市民の会（E-JAN）

・公益社団法人　子どもの発達科学研究所

・NPO 法人しずおか・子ども家庭プラットフォーム

・NPO 法人はままつ子どものこころを支える会（すまいる）

・浜松の未来を育てる会

浜松子ども支援NET

目次

1．浜松子ども支援 NET について

・浜松子ども支援 NET とは……P. 1

・理念と方針……P. 2

2．構成団体の紹介

・アクティブ……P. 3

・NPO 法人遠州精神保健福祉をすすめる市民の会(E-JAN)

・公益社団法人　子どもの発達科学研究所

・NPO 法人しずおか・子ども家庭プラットフォーム

・NPO 法人はままつ子どものこころを支える会(すまいる)

・浜松の未来を育てる会……P. 8

3．座談会

・第 1 部座談会　2020. 8. 26……P. 9

浜松子ども支援 NET……内山　敏

E-JAN……大場　義貴

しずおか・子ども家庭プラットフォーム……村瀬　修

すまいる……大嶋　正浩

・第 2 部座談会　2020. 8. 31……P. 18

浜松子ども支援 NET……内山　敏

アクティブ……浅井　陽子

子ども発達科学研究所……和久田　学

浜松の未来を育てる会……大隅　和子

内山敏

浜松子ども支援 NET 代表

【浜松子ども支援 NET とは】

近年、社会・経済状況の変化、価値観の多様性などを背景として、家族の形、子どもの姿、地域のつながりは大きく様変わりしています。特に子どもに関して言えば、虐待・いじめ・不登校・ひきこもり・発達障害などの報道を目にしない日はないほど、子どもたちが安心して育つことが難しくなっています。

こうした状況を受け、現在浜松市内では、福祉・教育・子育てに関する 20 以上の団体が活動しています。しかし、その動きは各自で留まっている場合が多く、それぞれの活動を通して構築してきたネットワークや専門性などが十分活かせていないのが現状です。また、見えてきた課題の共有や連携が不十分なため、困っている人が身近な場所で必要な支援を受けにくいことも課題となっています。

以上のことから、この度、子どもや保護者の支援に重きを置いて活動している浜松市内の以下 4 団体で「浜松子ども支援 NET」を発足しました。

●発起団体

○アクティブ（発達障がいや軽度知的障がいをもつ保護者と支援者の会）
○公益社団法人 子どもの発達科学研究所
○NPO 法人 しずおか・子ども家庭プラットフォーム
○NPO 法人 はままつ子どものこころを支える会（すまいる）

●令和 2 年加入団体

○NPO 法人遠州精神保健福祉をすすめる市民の会（E-JAN）
○浜松の未来を育てる会

【目標】

①本会構成団体を中核に、子どもと家庭を支援する各種団体が大同団結し、大規模な講演会や各種イベントなどの企画をとおして、子ども支援に対する浜松市市民の関心を高める。

②共同した企画をとおして結びついた各団体・個人の連携を強化し、適切な支援・身近な支援を展開する。

③浜松地域で子どもと家庭を支援する地域の支援体制を構築する。

≪理念≫

・全ての子どもが幸せに暮らす地域社会。

→別の生き方を考えられる社会にしていけると良い。

1つじゃなくて別の生き方も一緒に考えられるというポジションで関わっていく。

地域の中で生きていく形を多様な選択肢を提案していけるように。

「幸せ」だけでなく、「安心」も大切。

SOS を出せる、受け止めてもらえる社会が必要。SOS が疲れ切って出せない人もいる。

そういうことを言っても良いんだと受け止めてもらえる場所。

成人期までの視点は持つけど、育っていくということと、その子とお母さん、友達、先生など、人と関わり合いながら育っていく存在をどう支えるかというイメージ。

≪方針≫

・それぞれの活動領域における現状と課題を常に交換し合う。

・支援 NET が目指している方向性などを参加団体や市民に発信していく。

・全体で、課題や目標を共有し、各団体同士の関われる部分を見つけていく。

・それぞれの活動を地域などに向けて展開する際、支援 NET に参加していることをアピールし、支援 NET はそれを支援する。

⇒支援 NET として、浜松地域の子どもと家庭支援の課題と目標について、行政を含んだ地域に発信していく。

・理念やイメージ図にピンと来てくれる人とつながりたい。

・ピンと来た人にまず、イベントに参加してもらう。

浅井陽子

アクティブ代表

連絡先

Web サイト:
https://www.facebook.com/active.hamamatsu

メール:
active.hamamatsu@gmail.com

【会の活動内容を教えて下さい】

発達障がいや軽度知的障がいをもつ子どもを育てる保護者や支援者が、『社会的に生きにくさのある・なしに関わらず、全ての人たちが、地域社会で、学び・働き・生活するまち《浜松》』を目指して活動しています。その時々で保護者・支援者・当事者が感じた自分達にとって必要な支援・環境整備などの啓発活動を、おしゃべり会（保護者同士の情報交換）出張講座・意見交換会・講演会等を通して行っています。

【会における課題意識を教えて下さい】

特別支援教育の普及に伴い、発達障がいなど特に情緒に困難さがある子どもの教育的ニーズを特別支援学級に求める保護者が増えてきました。ただ、義務教育である中学校卒業までは、浜松市教育委員会が支援体制を整えつつありますが、現状、静岡県教育委員会等へ管轄が切替わり、中学卒業後の進路選択肢が少なくなることに対して、多様な進路先の整備が喫緊の課題だと考えています。子どもの成長に待ったはありません。昨年、どの都道府県でも、静岡県の高校入試基準を実施していると考えていたところ、神奈川県では、『スチューデントファースト』基準で入試を実施している事を知り、神奈川県教育委員会へ訪問してきました。また、他県も調べたところ、入試基準も、それぞれ地域ごと特色があり、静岡県でも、その子にあった『将来への生きる力・自立する力』を学ぶための選択肢が増えるように、中学卒業後の進路先の多様化、高校入試基準のあり方や更にその先の進路も含めて今後の活動として求めていきたいと思っています。

【なぜ子ども支援 NET に参加したのですか？】

将来に向けて活動を行うには親の会だけでは限界があると感じていました。子どもはやがて成長して大人になりますが、社会的弱者であることには変わりはありません。親の会からの視点だけではなく、支援ＮＥＴに参加する事で、違う視点から問題と向き合う事ができ、支援方法にバリエーションも増え、また、連携することで、社会に出てからも切れ目のない支援への啓発活動を行えると考え参加しました。

【子ども支援 NET に今後期待することはなんですか？】

子どもの問題は、複雑に絡み合って問題として表面化します。その問題について、支援ＮＥＴとして連携して支援に取り組むことが出来ればと思っています。また、負の連鎖（虐待・貧困、低年齢での出産等・・）の連鎖を断ち切る支援も必要だと考えています。障がいの有無ではなく、浜松の子ども誰もが抱える問題（ジャンルを問わず）支援する団体になる事を願っています。

大場義貴

NPO 法人遠州精神保健福祉をすすめる市民の会
(E-JAN いいじゃん)
代表理事

連絡先

電話番号:
053-461-6045

Web サイト:
http://www.npo-e-jan.com

メール:
info@npo-e-jan.com

【職場の活動内容を教えて下さい】

平成 9 年に発足、精神に障がいを持つ人も、支える人たちも暮らしやすいまちづくりを目指し活動を始めました。当事者、家族、支援者、各機関の専門職が集まり、所属や立場を越えたネットワークを作ってきました。平成１４年度に NPO 法人化、平成２１年度以降から「障害者相談支援事業」、「ひきこもり相談支援事業」、「地域若者サポートステーション」を開始し、障害領域だけでなく、若者の生活上の困りごとや悩み事等の相談、福祉サービスや専門機関との連携、ソーシャルワークや心理的支援を行い、更に市民参加の活動づくり等幅広く取り組んでいます。

【職場の領域における課題意識を教えて下さい】

浜松は，仕事と居住と医療，福祉，教育といったものが，ほぼ同地域で行われており、各分野が相互作用で質を高めていける特性があります。専門を飛び越え、お互いに提供者，消費者となり、よりよい地域活動をどこまで高めていけるかが課題と言えます。活動にあたって慢性的なマンパワー不足は大きな課題ですが、専門職だけでなく、もっと地域の中に出て地域の理解や協働を広げていきたいと思っています。

【なぜ子ども支援 NET に参加したのですか？】

今日問題が顕在化している不登校の子どもたちやひきこもりの若者支援や研究が進むにつれ、早い段階での支援の必要性をますます感じています。特に義務教育後の高等学校年代への支援の力不足を感じます。定時制高校の中退者のフォローについても、無業の背景に発達的な偏りを感じたり、他者との関りの少なさ、孤独、失敗体験の積み重なり、家庭内の問題などが学齢期の頃から起きており、本人のうまくいかなさに繋がってたりしていることが多いのではないかと考えています。

ライフステージに応じた相談支援体制や理解を広げていくことは重要です。子ども支援 NET に参加することはより多くの支援の糸口の発見と更なる連携につながることになると考えました。

【子ども支援 NET に今後期待することはなんですか？】

今後、学校や地域で孤立しない、人とつながりを感じられる場所を持つことが、将来のひきこもりや無業の予防、更には自殺予防にもなっていくと思います。精神に障がいがあること、ひきこもりであること、無業であることに過度な責めやプレッシャーがない安心できる関わり、いろいろな人たちとつながっていける居場所や環境、自由に情報が得られ、また発信できるプラットフォームや市民協働の潮流を、子ども支援 NET と共に創生していけたらと思います。

和久田学

（公社）子どもの発達科学研究所 主席研究員

連絡先

電話番号:
053-456-0575

Web サイト:
http://kodomolove.org/

メール:
info@kodomolove.org

【職場の活動内容を教えて下さい】

（公社）子どもの発達科学研究所は、子どものこころの発達研究センターとの連携のもと、科学的根拠に基づいたプログラムの普及、啓発、研究活動を行っています。

例えば、発達障がいを含めた、子どもの理解やこころの発達について学ぶことができる「こころの発達アテンダント」セミナー、学習障がいを含めた、子どもの学びについて脳機能や行動支援の観点から学ぶことができる「学びの発達アテンダント」セミナーを開催しています。

最近では、子どものいじめ問題への研究を進めており、いじめ予防プログラム Triple-Change を展開しています。

【職場の領域における課題意識を教えて下さい】

教育、子育ての領域では、まだ科学的根拠に基づいた方法が十分に普及していないようです。その結果、先生方は経験則を使うことになるのですが、それが間違っていたときの影響が大きいと感じています。（もちろん経験則の全てが悪いわけではなく、正しいことも多いのです）

行動科学、脳科学、疫学統計学など、子どもの支援に使える学問、研究成果はたくさんありますので、それを具体的な現場で使っていただきたいと思っています。

【なぜ子ども支援 NET に参加したのですか？】

元々、私たちの研究所は、浜松市のみを対象としていません。そのため、東京、大阪など各地の支援の現場を見聞きすることが多いのですが、その中でも浜松は支援者のネットワークがしっかりとしていると感じています。

浜松が支援者のネットワークの充実という面で、さらに発展していくためにも、このような取組が重要であると感じています。

【子ども支援 NET に今後期待することはなんですか？】

どの地域でも、支援者同士のネットワーク、専門家と支援者、当事者、家族のネットワークをどう作るのかが課題になっています。

子ども支援 NET を通して、一つの具体的な成功例ができればと願っています。

村瀬 修

NPO 法人 しずおか・子ども家庭プラットフォーム 代表

連絡先

電話番号:
053-525-9797

Web サイト:
https://www.npo-platform.com/

メール:
info@npo-platform.com

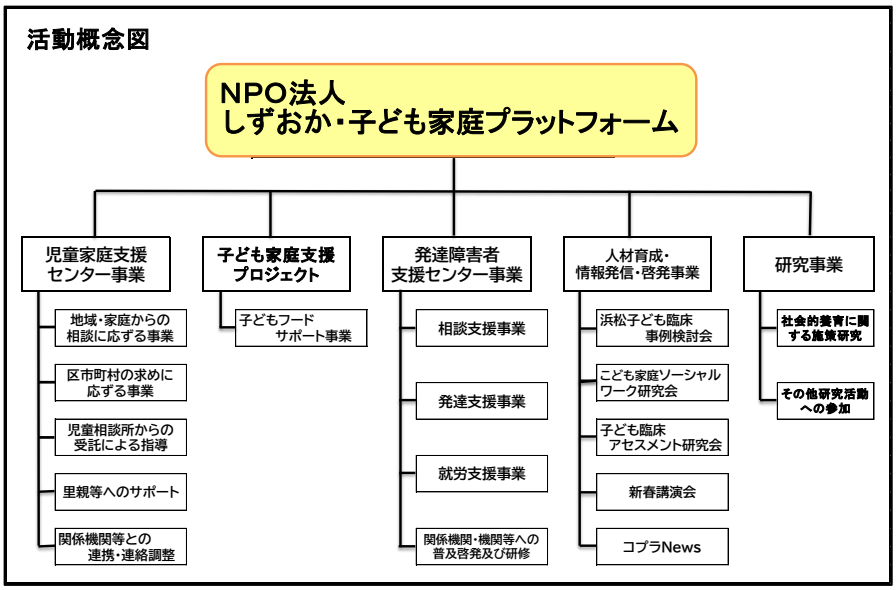
【活動内容を教えて下さい】

（１）本法人は、社会的養育が必要な子どもと家庭への支援とその支援者への支援を目指して、児童相談所業務の経験者が中心になって、2011 年 11 月に設立されました。

（２）2018 年 4 月からは、社会福祉法人 浜松市社会福祉事業団と共同企業体を結成して、浜松市発達相談支援センター「ルピロ」の運営にも参画しています。

（３）また、2020 年 5 月からは、コロナ禍にあって困難を極める子どもと家庭に対して、食材を届ける「子どもフードサポート事業♪ぐう」を開始しました。

（４）現在の事業は下図のとおりです。



【活動領域における課題意識を教えて下さい】

コロナ禍のもと、社会的養育への支援は急を要する事態となっています。学校再開によって給食が再開されても、家庭の収入が低い家庭ほど 4 割～5 割の減収となっているため（朝日新聞デジタルアンケート結果 7/5 記事）生活全体がひっ迫しているのです。子どもは、7 人に 1 人が相対的貧困の中にあり、これにより、欠食を余儀なくされている子どもが増えていると思われます。こうした状況にある子どもらへの支援は、喫緊の課題となっています。

【なぜ子ども支援 NET に参加したのですか？】

困難な状況にある子どもと家庭への支援は、社会的養護であれ発達障害であれ、一つの機関・団体、さらにはひとつの領域による支援では限界があります。様々な支援団体個人が互いに連携して支援を行う地域づくりを目指したいと考えました。

【子ども支援 NET に今後期待することはなんですか？】

子ども支援の重層的な連帯をもとにした支援ができる地域づくりの中心になって欲しい。

大嶋正浩

NPO法人はままつ子どものこころを支える会 代表理事

連絡先

電話番号:
053-570-8142

Web サイト:
https://www.kodomosmile.net/

メール:
smile_jimu_2525@outlook.jp

【職場の活動内容を教えて下さい】

子どもたちの２０，３０年後の姿を想像してすべての子どもの「生きる」ことを支えていきたいと考えています。

平成 27 年 12 月から活動を開始しました。子どもたちに関わる保育士・幼稚園教師や小中学校教師を支えるために「ピンポイント研修会」や「事例検討会」などの人材育成・研修会を実施しています。そして発達障害や不登校等で悩んでいる保護者等の相談にも応じています。

平成 30 年度より浜松市から「校外適応指導教室」の運営を委託され、市内 8 カ所の教室の運営を行っています。不登校児童生徒が将来社会人として豊かな人生を送っていくことができる力が育まれるように活動しています。

【職場の領域における課題意識を教えて下さい】

子どもたちは本当に大変な時代を生きていると思われます。日本の子育て文化は崩れつつあり、人間関係の希薄化、母子の孤立、仮想世界、虐待など、子どもが育つ環境は悪化の一途をたどっています。

根本から変わるには、浜松市の地域から教育を支えていこうと、日々子どもたちと向き合い関わっている有志が集まり勉強会が立ち上がりました。その中から地域で子どもや教育を支える実効的なネットワークを構築していく必要があると考え、ＮＰＯ法人を設立しました。子どもたちの主要な生活の場は学校です。人とつながって生きていく基盤ができるときです。昨今、コミュニティスクール等と言われるようになってきました。つながるという基本を実践できる、本質から子どもたちと向き合う制度に成長していってほしいと願っております。

【なぜ子ども支援 NET に参加したのですか？】

社会が複雑化し、価値が多様化する中で子どもたちや保護者が抱える問題も様々に多面化しています。その子どもたちや保護者を支えていくためには、皆さんと協力していくことが必要だと思います。子どもたちや保護者がもつ問題に対して、様々な視点や知恵によって支えていけることは大切なことであると考えています。

また、我々自身が常に「つながる」ということを実践することが大事だと思っております。つながるということは、我々の本質の目標でもありますが、決して心地いいばかりではありません。同じように思っても実は微妙に食い違いがあったり、もともとかなり性向が違っていたり、意見の食い違いが起こるかもしれません。それらを乗り越えてつながるということが、子どもに対しても何か伝えられるのではないかと思っています。ただ、子どもの幸せを願うという一点では、皆で共有できると思っております。

【子ども支援 NET に今後期待することはなんですか？】

ＮＰＯ単独の活動では視野が狭くなり独善的になっていきます。様々な視点や意見を取り入れることにより活動はより広がりを持ち、有意義なものとなっていくと考えています。

とにかく、様々な人が協働して子どもとかかわっていくことが要です。いままで、様々な人と出会いましたが、子どもを大事にしたいと本気で思っている人たちとは、考えやタイプが全然違っても心地いい活動ができました。子どもへの思いのある人が集まる、変わった人が大勢いる集団になるといいと期待しています。

大隅和子

浜松の未来を育てる会　代表

連絡先

電話番号:
053-548-4305

Web サイト:
https://kokomihiroba.jimdofree.com/

メール:
miraiwosodaterukai@gmail.com

【職場の活動内容を教えて下さい】
　母となる女性とその家族がイキイキと人生を歩む社会を目指して産前から産後、子育ての支援を軸に活動しています。
・父となり、母となり、笑顔で子育てができる社会の実現
・母となる女性が、人と人、社会と自分のつながりに気づき、自分らしく生きることができる社会の実現
・地域の人たちとのつながりの中で安心して子育てができる未来の実現を目指しています。

【職場の領域における課題意識を教えて下さい】
　ヒトは社会や人との関係の中で育つといわれていますが、地域のつながりの希薄化がすすみ、核家族、孤育て、の現状では、安心できる場で一緒に子育てする仲間が必要です。特に、乳幼児期は人生の一番大切な土台を作る時期とされ、この土台が空っぽだとポイントでつまずきがあるといわれとても大切な時期です。さらに、育てる親も敏感期といわれ、親になるためにも重要な時期です。だからこそ、全ての子育て世帯に支援が必要です。
私たちは、産前から産後、子育てを安心してできる場をつくり、子どもの心と体の成長のための予防的支援の場となることを目指して、産前・産後サポート、子育て支援、学びの場づくり、に取り組んでいます。

【なぜ子ども支援 NET に参加したのですか？】
　社会の現状としては、共働き家庭の増加、核家族化、社会とのつながりの希薄化が子育て世代の産前産後にも影響を及ぼしています。結婚準備期から、妊娠期、子育て期に渡る切れ目のない支援が必要です。地域が安心して暮らせるようにと願う方々とつながり、一人でも多くの子どもが幸せに、健やかに育つことを願って参加しました。

【子ども支援 NET に今後期待することはなんですか？】
　学童期、思春期に課題をもつ子どもたちと関わるとき、乳幼児期のことに思いを巡らせることがあります。各方面の専門家、支援者、当事者、家族の皆さんと出会い、みんなで育ち会うきっかけが生まれ、子どもたちが生き生きと生きていくことが出来ることを願います。

浜松子ども支援 NET　座談会（第１部）

2020，8，26

内山：皆さんお集まりいただきましてありがとうございました。子ども支援 NET の特別座談会ということで、支援 NET に参画してくださっている方に本日お越しいただきました。この座談会は２パートに分かれまして、今回は NPO 法人子ども家庭プラットフォーム、NPO 法人 E-JAN、NPO 法人すまいるからそれぞれの代表がお越しいただいています。司会は、支援ネット代表の内山が務めさせていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

では、早速ですが、どこに着地するか分からない部分がありますけれども、本日は一時間程度を考えていますので、皆様方と意見を交わせればと思っています。まずはそれぞれの団体からですね。団体設立の目的やその業界で子どもについて課題となっていること、課題と感じていることなどは自己紹介代わりに、皆さんにコメントをいただければと思います。

村瀬：NPO 子ども家庭プラットフォームの村瀬です。僕は、退職後どうするということをあまりしっかり考えもしないで、児童相談所職員を定年で卒業しました。ただ、児相で働いてきて、児相が疲弊している、家庭児童相談室や施設も含めて社会的養育の最前線で働いている人たちが大変疲弊している。また理念的にも目的を見失っているっていう風に強く感じていました。そんな感じもあったので、児相だけじゃなくて、家児相とか社会的養育に携わっている人たちの後方支援をやりたい、児相での経験を生かして、そういうことができるじゃないかと思って、NPO を設立をしました。そして、児童相談所を卒業してくる仲間を次々とリクルートして、２年後ぐらいですかね、浜松市から児童家庭支援センター業務を受託することができました。

児童家庭支援センターは、児相の業務を補完する位置づけで設立した児童福祉施設です。家庭からの相談に応ずるとともに、行政の求めに応じて相談活動を展開することが求められています。我々は、主には、家庭児童相談室と母子保健とかの困っているケースについて、定期的にコンサルテーションを実施し、面接への陪席や訪問家庭訪問への動向も求められて行くっていうこともやっております。

２年前に、いろんな事情があって、発達相談支援センタールピロの経営、運営に共同企業体として参画することになりました。発達障害者支援センターは、現職の時に県のセンターの設立に関与したこともあり、違和感はありませんでした。ただ、ルピロをやって認識を新たにしたことがあります。社会的養育の分野から見ると発達障害の領域って、どちらかというと、子どもの相談の中でもエリートだっていう感じがあったんです。それは、当事者の会があったり、親の会があったりね、児童福祉の中ではなかなか見られない支援体制がある。ましてや社会的養育の中では、そんなのほとんどない。それがあるわけなので、やっぱこれはすごいことだと。しかし、ルピロのケースを見ると、社会的養育を背景にしたケースは決して少なくない。不適切養育を背景にした発達障害が少ないわけではない。だから、子どもの問題はやっぱ繋がってるんだなっていうのがね、ルピロをやってみてとても良く分かったわけです。そして、子どもを支援するっていうのは、あんまり垣根は無いんだとも思いました。支援としてつながっていると思いました。

それで、今後の課題なんですが、社会的養育の支援の在り方を変えていくというのは、課題が大きすぎて、僕にはちょっと手に余る。どういうことかって言うと、全国的に児相は、事故、特に死亡事故が起こらないようにすることを至上課題とされているので、子どもと家庭の支援っていうことがやっぱり、二の次、三の次になっているって言うかな。活動が、子どもと家庭への支援という形になかなかなりにくい。また、社会が「死亡事例をなくせ」と求めてるって言うような状態もあるからね。外野からすれば、難しい課題になっています。

そうなると、もう別なところから、なんとか応援してくっていうようなことが課題だなって考えています。最近のコロナの感染拡大によって、学校が休校になる。その中で給食がなくなっちゃって、食べること困っているような子ども達が生まれている。子どもの７人にひとりは貧困であったものがさらに深刻になっている。そうした事態を SSW などから聞くと、そういう一群を支援する必要性を強く感じています。そうした問題意識をもとに、この５月から我々は、フードサポート事業として、困窮している家庭に食材の支援を行う事業を始めました。財団法人からいただいた資金を原資に始めましたが、新聞にも取り上げられて募金が集まり、今、120 万円ほど集まっています。1000 円セット、2000 円セット、3000 円セットっていう風に食材をセットにして、そして、当面は、スクールソーシャルワーカーとそれから、30 を超えるほどある子ども食堂や学習支援、居場所なんかを運営している団体に配って、そして、

子ども達に、持ち帰ってもらうようにしています。だから、金をもう全部モノに変えて、それでドンドンとやっていこうっていう風には考えています。

最後ですけれど、国の事業でコロナ対策事業があります。それは、休校などで子どもの様子が見えなくなってしまっているので、食材なんかを家庭に届けながら状況をつかんでくるという事業です。それを浜松市が採択してくれないかってことをいま、働きかけています。9月初めぐらいになどうなるか分かるみたいですから、またご報告申し上げたいと思います。我々は、それやる際にも、一団体が受託するっていう事じゃなくて、実行委員会形式で、みんなでやりたいっていう提案をしています。そういう方向性をもって、今いろんな団体と話を進めています。ちょっと長かったね、ごめん。ありがとうございます。

内山：その新型コロナウイルス関連で、要するに、見えない子どもたちが増えてしまったっていうことなんですかね？

村瀬：東京なんかの事例ですが、不適切養育とか虐待とか言われているケースは児相が定期的に家庭訪問をしています。それが「コロナだから来ないでくれ」って言われて、行けなくなっているんです。それで、ますます子どもの状態が見えなくなっている。学校が休校しているから見えなくなっていることに拍車がかかっている。そこを何とかしようというのがこの事業です。

内山：次にE－JANの大場代表。よろしくお願いします。

大場：NPOE-JANはこの3つのNPOの中では一番古くて、平成7年ぐらいに、地域の精神保健医療・福祉に携わっている人がとにかく話し合おうという形で、手弁当で集って勉強会を始めたというところが元でした。精神保健法が改正され、精神保健福祉になる直前で、「福祉」がつくことにより生活支援や就労支援を進めていく根拠になると、当時の私たちは盛り上がっていましたね。平成9年に任意団体で、遠州精神保健福祉をすすめる市民の会、E-JAN という名称の団体を立ち上げました。その頃、私はだんだんも立ち上げて、精神障害者の地域支援が始まったところだったので、地域の理解を深めたり、普及啓発活動をして、精神保健福祉を後押しして広げていく役割をE-JANが担っていました。専門家や平成10年に国家資格化された精神保健福祉士を学んでいる学生さんや市民や当事者、家族そういった人たちが集って精神保健福祉について語って、活動してく、そういった会になりました。

何をやっていたかと言うと、いろんなイベントとか勉強会とか、他の先進的実践している取り組みの情報収集とか、講師を呼んで勉強会や講演会とか、あと騒いだり、飲み会やったり、これからの地域精神保健福祉活動について夜な夜な語ったりと、そんなことをしていました。そうこうしているうちに、何か任意団体っていうのは運営が不安定で、誰がどうして行くのかっていうのもなかなか難しくなってきて、ミッションと責任体制を明確にしていくために、平成 14 年に NPO の法人格を取りました。法人格を取ったのもこの地域では早かったんじゃないかなと思います。そのころになると、いろいろ精神障害の人に対する、例えば今で言いますと、地域活動支援センターや就労支援とかが、自立支援法制定に伴って市内にいろいろ生まれてきたんですね。社会復帰施設の少なさは全国ワースト3ぐらいに入っていたので、1つの法人や、1箇所の人材で広げていくよりも、E-JAN で全体をとにかく底上げしていくってことで参入者が増えることを当初から考えていました。かなりいろんな法人が動きを取り始め、若い人材もこの業界に入ってき始めていましたので、それをバックアップするってことをしていました。H20年頃になるとですね、設立から 10 年たってどうして行くかってことで4日間連続して「精神障害者の絵画展」や「シンポジウム」等大きなイベントをやりつつ、次の方向性を模索し始めました。生活支援や就労支援は増えてきたのですが、ひきこもりの人には、中々支援の手が届かない現状にどう取り組んでいこうっていう話が出てきて、ボランティア訪問を始めたんですね。そうしたら結構やりがいがあった、これは手ごたえがあるなっていう感じで、上手く外に出られた人もいれば、上手くいかなかった人もいるんですが。翌年、国からもちょうど、ひきこもりの相談支援センター構想が示されてきて、政令市になったことで誕生した精神保健福祉士センターが我々の事業を引き取って、市が一次相談支援を行い、NPO が訪問支援を行うという官民連携の形が出来上がりました。中区に今度、精神障害が相談をする機関がなかったので、施設をもたない形での相談支援事業所を立ち上げました。ひきこもり訪問は、翌年

になると居場所のが欲しくなってくるので、居場所を立ち上げて。その次に、また今度はサポートステーション（就労支援）を立ち上げた。隙間隙間を縫いながらやっていたら、結構、その隙間が、その後々大きなニーズとして顕在化してくるということを経験しました。一方、司法書士と連携しての自殺対策。これを始めて 10 年目になりますが。多重債務等からうつ病や自殺してしまう人への介入を精神保健福祉士が行い、司法書士との連携も強化していく。福祉を必要とする精神障害者だけでなく、メンタルヘルスの課題解決に関わるという面でも取り組んでいます。浜松市はいろんな機関ができてきているので、そういうところとまた、さらなる連携をしながら広げていくことを考えています。子どものことに引き寄せて考えますと、例えばひきもり等、若者年齢になって問題化してから相談となると、複数の要因が絡み過ぎていて、解決にとても時間がかかるし、ご本人も家族も結構苦労することがあります。最近はスタッフが定時制高校へ出かけてって、そこで定時制高校の生徒さんたちと早めにコミュニケーションをとって、セーフティネットのような相談の支援の仕組みを作ったりしています。NPO の役割として、直接ではないんですけど、私が教育委員会の不登校支援とかですね、青少年育成センターの若者支援とかの協議会等に関わり、筋道作った上で、NPO のスタッフが、行政や様々な機関と顔が見える関係から始まり、連携の仕組みを作ったり、ライフステージ間で、この年代でこれが課題になるんで、前のステージでもう少し何とかならないかなとか、というようなことが検討できるようになってきたのではないかと思います。自分の目の前のことだけで済ませないようにして、いろいろ課題を共有するっていうのが、最近やっていることですね。さらに言うと、結構、社協とかですね、民生委員さんからあがってくるケースなんかもひきこもりで言うとあるんだけど、それがちょっとやっぱり立ち消えちゃったり、ひきこもり相談支援センターも中区に１か所だったりするので、もっとこうアウトリーチして、社協のバックアップとかねできないかなって思ったり。あとメンタルヘルスの問題で言うと、企業もかなり関心のあることだと思うので、就労支援って形でわりと福祉ってお願いすることが多いですけど。それもお願いしつつ、企業の中のメンタルヘルスのことをもっと地域で話しあったり、我々専門家がもっている知識とか、ノウハウとかを企業の方たちに提供して、なんかもっと win-win の関係で企業と街づくりとか、そんなのできないかなって思っています。

内山：企業とのタイアップも。

大場：はい。企業とか社協とのタイアップを。それも一方向ではなくて、相互方向の関係性で作っていけないかなっていうのがあります。

内山：心の問題はさまざまな領域に存在しているものですからね。

大場：そうなの。例えば鬱もそうでしょうし、発達障害の社会的にある程度こじれたような人も企業のなかにいるでしょうし。企業に働いている人たちに今度ご家族に、メンタルヘルスの課題を抱えて、なかなかお仕事に集中できない、自分のエンパフォーマンスが低くなっている人もいるでしょうから、そういうことへのお手伝いとかねできないかなっていうふうに思い始めています。

内山：はい、ありがとうございました。それでは、続きまして NPO 法人すまいるの大嶋代表お願い致します。

大嶋：はままつ子どものこころを支える会（すまいる）の代表してます大嶋です。よろしくお願いします。今、本当にいろんな先生がおっしゃったように、いろんなところといろんな連携して、でも専門家はまだまだ視野が狭くて。私自身、今、少子化対策委員会っていうのを作って、医師会の中に。子どもの赤ちゃんのフォトコンテストやって、ちょっとでも赤ちゃんの顔みんなに見てもらう、そんなバカなことやってますけども。

　まあ、それを横に置いといて、元々あの発想の基本が、あの教育委員会と他の所が連携して、なかなかどの地域もうまくいっていない、もちろん、医者と地域もうまくいっていない。どこの地域でも同じような状況があります。そして、医療と福祉もバラバラ、同じ人を見るのに医療と福祉が全然別の発想で、全然関わってなくてお互いどうのこうの、バカじゃないか、という風に思ってる。おなじような発想で、少しでも子ども中心で考えて色々組み立てをしてくることをすれば、日本人っていい人いっぱいいるので、みんなそれなりにパワーを出してくれていいんじゃないかな。そこの何かこう抵抗になって

るものをどうやって崩してったらいいかなっていうのをずっと考えてるのが基本です。

まぁその中で、平成 14、5 年から小粥先生（教育委員会）と一緒に相談支援をやってて、その頃まだ、指導教室なんかもできてなくって、私は校内にもデイケアが必要、全部の学校にデイケア入れましょうとうるさく言っていました。それが今の発達支援教室だったんですけどね。

そして、あと、適応指導教室、フリースクールみたいなものもちゃんと作ってかなきゃ、小粥先生がそれを一生懸命やってくださって、あと外国人の支援の充実も必要と言ったら、やってくださって。

そういう中で、小粥先生が退職するのを待っていて、NPO をなんとかつくれたらっていうことで、一緒にこういろいろ、もちろん個人的なものを作りたいのではなくて、公でできるだけみんなが結集するものを作りたいということで始めたんですけども。平成 26 年の 7 月に海の会というの発足しまして、海の会といういろいろなものを包含する会ですが、いろんな方々に、教育委員の方から教師のかたやら、もちろん、福祉、心理、医療もちろん、それ以外の方も含めて集まって頂いて、意見交換をして、その中で、平成 27 年 1 月に NPO の法人化の検討を開始して、そして 5 月には、活動内容等について検討して、そして平成 27 年の 9 月に準備をして、平成 27 年 10 月に NPO 設立のための総会を開いて、そして 12 月ぐらいに NPO になったというそういう経緯があって、とにかくあの教育と地域あるいは、他の分野が連携してなかったら、子どもはかわいそうだというのがすごくあるし、学校の先生も一生懸命やってる人がいるし、地域も一生懸命やってる。そこをどう擦り合わせをしてたらいいのかっていうのが課題で、とにかく学校の先生達にとってもプラスになるし子ども達にとってもプラスになるようなことをやりましょうということで、まあ当面、力はないので、地道な活動ということで、中学校区中学校小学校幼稚園の一つの中学校を頂点にした小学校中学校区でケースカンファをやりましょうっていうことで、はじめました。今、3 箇所ぐらいのところで、ほぼ持ち出しに近い形で、あの持ち出しというよりも手弁当でボランティアに近い形で会員の先生が活動してくださっている。そんなのとか、あと、それまで地域でやっていた、いろんな研究会、勉強会を少し一緒に、親の会、発達の森って親の会が和久田先生がやっていた会を、そのすまいるで引き継いでやってこうとか、とにかく教育関連のことをできるだけいろいろ広くやってこうそして、教育について考える、子どもについて考えるって言う事を、みんなで集まってやるって、そういう地道な活動から始まりました。そのうちに平成 30 年の 4 月の、もちろん平成 29 年から検討が始まったんですけども、適応指導教室もご存知と思いますけど、校外適応指導教室というのが、その頃は 6 か所、今 8 か所になってるんですけども、その 8 箇所を委託を受けれるかもしれないっていうことで、手を上げてで交渉してこんなふうにできますよっていうことで、その適応指導教室を運営するっていうことを平成 30 年 4 月からやってきました。元々の適応指導教室には関わっていたので、実態はよく分かってたんですけど、やっぱり支援というものが適応指導教室に対しなかったんですよね。あの教育委員会やって下さってるんですけど、やっぱり現場のいろんなところまでは目が届かないし、子ども達にどう対応してるところまで目が届かない。やっぱりそこのところまでちゃんとやっていかないといけない。各教室がバラバラで孤立して、不安な中でやってる各教室が連携してお互い交流があって情報が全部行き渡って、それぞれの特徴はあっていいけど、今自分たちがやってることが、どういう意味を持っどういうことになってくんだっていうことを分かって意味を持ちながらやっていける適応指導教室にしたいということで、適応指導教室を受けて、始めて。まあ今 2 年目、3 年目ですか、になったんですけども、まあその中で議論もあったり、色々ありましたけども、だんだんこう若手の人、中堅の人たちが少し頑張ってくれたりして、やっているんですけど、まだまだバラバラですね。だからどういう風にしたらいいかなっていうのを今考えてて、そして、まだ、全然あの 3 ・ 4 人だけでの議論ですが、これからみんなと議論しようとしてるんですけども。やっぱり適応指導教室にあった子ども感、子どもに対して何か見方っていうので、勉強会をその子どもに対して見方をどういうことできるかっていうことを中心に、みんなが一致するってことが大事だと思って。勉強会しようと思っているのは、イエナプランって言うオランダのイエナプランって言って、異年齢の子どもたちがそれぞれの課題とかなんかも話し合いもするし、異学力の子が勉強もするし生活中心にいろんなことをお互いに言い合う発信する、そして勉強は異年齢でその子の必要に応じて、先生っていうか、こういう大人が観たり、年長の子が下の

子を見たりっていう形でやるという考え方です。それこそ適応指導教室の5人、10人、15人集団が伸びていくためのすごくいいスタイル、それがオランダなんかでは、教育の形として全土がそれでやってるって言う。そしてオランダが世界一子どもの幸せ、子供が幸せを感じてる国って、日本はかなり低いんですけど、オランダで有名なんですよね。本当に子ども達が政治の話題もするし普段のいろんな困りごとも5人、10人、15人で話して、そういうやり方がもうほんと 30 年、40 年前から行われてて、そういう理念のところ勉強して、我々が今、適応指導教室でどんな風に子ども達とちゃんと関われているかっていうことを考えていければというようなことで今考えてますけど。とにかく適応指導教室 8 教室あって、30 人近くのスタッフが、本質の議論が行われたことがあんまりないので、子ども感や子どもとどうしてる、どうしたい今、どんなことが困ってるなどいろんなことをみんなですり合わせなきゃいけないと思います。今後も頑張ってやっいけたらと思ってます。

そして、それが今、メインの課題になってますけども、学校っていうものは、とにかく子供にとって大きな存在ですよね、小・中もちろん幼稚園・保育園もそうですけど、そことやっぱり地域が連携していかないと、そして、生活と全部連携していかないということを考えています。そうすると相談支援事業とか、今プラットフォームがやってる食の問題なんかとも、全部学校がオープンになって関わっていくっていうそんな形に出来たらいいと思います。それで、困ってる人ほど、色々な関わりができるって言うのがいつも理念なので、やっぱり不登校の子達が一番困っててその子達が色んな人の手助けを受けたり、いろんな人と繋がっていく、彼らが地域に出て、地域の人に色々かかってもらえるっていう事が。地域の連携としても地域の人を救うっていうような形がイメージできます。困ってる人をハブにして（中間の）皆がつながってくっていう、そういうのとしても不登校の子達っていうのはすごく地域にとって、社会にとって大事な存在ではないかなって。皆さんご存知かもしれないけど、浜松市の不登校児童は、この四年ぐらいで平成 28 年に１０００人ちょっとだったのが、1100 人 1200 人 1300 人、ついに今、1400 人を超えていて、すごい勢いで増えている。もっと増えてくだろう。小さい子を見てるとまだまだ日本も浜松もどんどん状況悪化してくので、どんどん不登校の子が増えていくだろう、そして後学校の先生はもっともっと苦しくなってくだろう、と感じます。

先日ある会で、学校の先生がちょっとアンケート項目について、こういう例えばリストカットしちゃうとかいろいろな問題を聞くと、子ども達の色んな蓋を開けてしまう。蓋を開けちゃうと、そうすると自分たちはどうしていいか分からない、対応できない。だから蓋をしたい、だからそういう問題は出したくないって言う。それは違うでしょっていうことで。やっぱり蓋を開けないまま思春期大人になった時の悲惨さっていうの我々はいつも見てるので。やっぱりより小さい頃に蓋を開けないといけないので、そこのところをちゃんとやりたいよね、でもそれは学校の先生が苦しくなって倒れたらおしまいだから、教育委員会とかみんな全体で学校の先生たちをフォローしながら、そういう蓋も開けながら子供達を色んなとこでフォローするってそういうことが必要だよねって言ったんですけど。まぁなかなか先生達にとって辛い話だったと思うんですが。そんな風に日本全体が、やっぱり蓋をして、そのツケが、村瀬先生や内山先生、大場先生を見てて分かるように、親御さん達自身がも苦しい人生送ってきもう子育てどころじゃないっていう親御さん達いっぱい見てると思うんですよね。やっぱりその子達をもっと早く救ってかなきゃいけないし、これからそういう親御さんを増やしちゃいけない。だからやっぱりちゃんと早めに蓋を開けて、そこに学校で無理だったら地域も含めて関わってくっていう、そういうシステムを地域で作ってないと。そのために子ども支援ネットっていうように、もう専門家なんてそんな別にどうでもいい。それより、地域のいろんな思いのある人達が連携できるようなプラットフォームを作って、みんなでやってくって必要がある。だからスマイルもその一部として動けたらいい。そしてしかも不登校の子達が、地域に出ていくための、そのハブとして考えたいっていう風に思って、すまいる全体の色んな活動してる。そんな状況です。

内山：ありがとうございました。様々な領域が、先ほど村瀬代表もおっしゃっていましたけれども、その子どもの問題っていうのは、いろいろ繋がっているんだっていうようなことをおっしゃられていたわけなんですけれども、あのそういうところとちょっと関連しましてね、先ほど、大嶋代表もちょっとおっしゃっていた事なんですけど、僕もその問題とし

ては、例えば、新型コロナの関係で教育現場で起きてることっていうのは、子どもの夏休みを減らして、できるだけ早く大人の流れに乗っけて行こうですとか、あとは貧困にしても社会的養育にしても、村瀬さんはソリューションを持ってやっているわけなんだけれども、教育現場がそういうことに対して、具体的に動いている風はない。

何が言いたいかって言いますと、子どもが様々な形で SOS を出しているということに対して、僕ら大人っていうのは、結構鈍感でいたり、先ほどの大嶋代表の話でいうと、むしろ意識的に蓋をしちゃったりっていうようなことが生じているんじゃないか思うんですよね。それ以外にも、引きこもりや精神障害などにつきましても、それは例えば家庭の問題だとか、医療の対象だみたいな形で子どもが出す SOS に対して、僕らは大人はちょっと冷たいんじゃないのっていう風に思う部分があるんです。そうした子どもの SOS に対して気付くって事がまず大事だろうし、連携するためには気付かなければいけないわけですので、そうした子どもの SOS っていうことに対して、どのように皆さんお考えなのか少し意見を聞かせていただければと思うんですが。

村瀬：社会的養育という側面から、プラットフォームはやってきたんだけれども、今の貧困問題はものすごく分かりにくいんですよ。それで、大人が鈍感と言えばその通りなんだけれども、やっぱり昔のように一見明白に困窮っていうのが見えない。だけど、家では十分に養育されていない、面倒が見られていない。食事も十分に提供されていないというのは見えないですよね。だけど、継続的によく見てればそれはまあ分かると思うんだけれど。そういう意味ではね、このコロナ禍でつくづく思ったのは、学校制度っていうのは本当に偉大だということです。だって、子どもがみんな行く仕組みでしょ？子どもが生活する、あるいは子どもの生活が見える場所が学校。勉強を教えるってこともっと大事だけれども、子どもをどう見るのか、そこがねやっぱりとても意味を持っている。学校というものが存在すること自体がとても貴重だっていうことがこのコロナの中でわかったわけですよ。だから、文科省は学校のプラットフォーム化という方針を掲げるのは大事だと思います。そのリアリティは多分現場ではないんですけど、学校が子どものプラットフォームとして機能すれば素晴らしいことだと思います。

いま、スクールソーシャルワーカーなんかと一緒に、中学校区単位あるいは小学校単位で、子どもが歩いて行けるところに、子ども食堂なり居場所なり学習支援っていうものを作れないかということを検討しています。実際に約 18 中学校区ぐらいでやっている人たちがいて、それが「ちこネット」（「地域子どもネット」の略）と名付けて、先回第２回の経験交流会をやっています。中学、小学校という単位で、困窮家庭を掘り起こし、つながりを持っていくということしかないかなって最近は思っているんですね。そこに学校がプラットフォームのように見てくれるって言う風に成長してくれれば大きく変わるんじゃないかと思います。そう考えると、学校という制度は、ほんと素晴らしいと思う。

内山：でもその中で例えばその先生の中にもですけど、地域の中にもですが、「なんで子ども食堂が必要なの」とか、「なんで無料の学習支援は必要なの」とかって思っている人たちも大勢いるんじゃないかと思うんですよね。そうした人たちにも何か意義を知っていただくような、ソリューションを持てるといいのかななんていう風に思いながら今、お伺いしてました。

村瀬：東区では、居場所かこども食堂か学習支援のそれぞれが合わさったような集まりを民生委員の方が、長期休みの時を利用してやっています。そういうところに、そこに学校の先生来てくれたりするわけ。東区なんかはそういう点では進んでる。そういうことが広がればと思っています。

内山：それはいいですね。

大場：それはあれですか。東区の民生委員の方たちの活動の下地がこうあってですか？

村瀬：それはね、もうスクールソーシャルワーカーです。ソーシャルワーカーが民生委員の動きに連動して、子どもを誘うとか、働きかけていくつか作り上げたんですよ。二つ三つ四つありますかね。頭が下がる活動してると思うんです。

大場：そういう時に地域の人たちを巻き込みながらっていうか。

村瀬：そうです。

大場：そうすると、やっぱ必要だっていう時に、先ほど大嶋代表がおっしゃったように、地域に良い人がいるうちに、そういう物を作っていかないと、みんな疲れちゃうってわけですよね。やっぱ力があるうちに次のことを考えないといけない。子どもの問題って先送りすると悲惨なことになってしまうのでね、こういう課題や発想を地域の中でどんどん積み上げて、いずれ掘り起こしていくっていうことはとても大事なことだなって思いますね。

内山：不登校関連から言うと。

大嶋：村瀬さんが言うとおり、だから学校に中に地域を持ち込んだり学校が地域に出たりとか、そこがぐちゃぐちゃになってくと本当はいいんですね。ただ、今コミュニティスクールっていう制度ができてるけど、評議員作って、やっぱり綺麗ごとで終わりそうなので、やっぱりそういうのはもっともっと泥臭くやっていけるようなそういうような流れを作ってかないと。それにやっぱり地域のいろんな人が出てこないと。聞いていいなと思ったんですけども。やっぱりこの活動、さっき言った子ども達と付き合うっていうか、子ども達の色んなものに蓋をしたり、いろんなところを子どもたちに冷たいっていう、それはもちろんわざと冷たくしてるわけではない。みんなそれ意地悪じゃないので、ただその子ども達の色んな刺激に出会うと嫌な気分になる大人っていっぱい今いるんですよね。親御さんでも子どもの声聞くとちょっと辛いってなっちゃうのと同じように。やっぱり子どもたちのいろいろ感情をどっとぶつけられると、感情を抑えて無理してきた人にとってはかなり辛いんですよね。自分を抑えてきた人ではなく、それこそわがままやって、いい加減やってきた人が、もうちょっと社会に貢献しろっていう形がいいのではないかと思います。そういう人をもっともっと掘り起こして、意外とそういう人いると思うんですね。わがままやって、大変な事やってきた人っていうのは、衝動コントロール良くない人なので、その気になったらどんどん社会活動するかもしれない。そう言っちゃうとこういう NPO やる人がひいちゃうかもしれないですけど。でもまぁそんなもんなんですよね。人間っていうのは、そんな立派なもんではなくて、色々なものが、漏れ出ちゃう。でも漏れてることが、すごく人間らしいことなんだけど、それを抑えて生きてくるとやっぱり子ども達の色んな衝動に出会うと、ちょっと、あまりいい気持ちがしない。これもよく分かりますよね。だから、やっぱりもっともっとこう、子ども達の衝動を大人が浴びて、大人もちょっと若返るようなそんな仕組みをつくる。そういう点では村瀬さんも 70 ぐらいだと思うんですけども、もうむちゃくちゃ元気で、新しいことを考えてるっていうように、やっぱり子どもとか若い人と接してると人間ってあまり歳をとらない。この地域にいろんな活動を広げてくっていうのは、そういう意味があって。地域に活動を広げることは不登校の子ども達の為だったり、社会的養護の子ども達だったり、精神障害の人たちのために見えるんだけど、実は、我々自身のためなんですよね。様々な感情と向き合いきれなかった我々のために、人ともっとつながりたかった我々のためにいろんな活動があり得るっていう風に、ちょっとすごい変な見方だと思うんですけど、私なんかそう考えてるんですよね。やっぱりこう人間の集団とか、動物の集団て、マスで一つのものであって、不登校やってる人も精神障害やってる人も犯罪やってる人も我々もみんなマスで一つの人間集団であって、いろんな役割を持ってやってると思うんですね。だから、それが皆が色々どこが悪いといって切り捨てるよりも、みんなでわーってやりながら生きていくことがやっぱり健全な人類であると。無茶苦茶な話をしてますけども。そういう風に考えているのでやっぱり、そこを切り捨てるとそうでない普通に生きてるつもりの我々は『かたわ』になってしまう。そういう意識があるので、やっぱりいろんなことをやってる人たちと連携しながら、そして、もうちょっと悪さした人達も、こういう、もうお前らいい加減な事やってきたんだからちょっと社会的な貢献しろと言うぐらいな感じで、こういう活動に引っ張りこんで、みんなでやっていったらいい。でもそれは、専門家には十分できないので。専門家なんていう鎧がない人たちが、もっともっと一緒にやれたらすごく素敵な社会になるんではないかな。多分そういうところは、日本全国あんまりないと思うので、浜松がそういう地域になったらいいなと思いながら見てます。

村瀬：子ども食堂や学習支援などで、専門家がいて、やっているのはごくわずかです。ほとんどのところは、民生委員だとか、地域の支援者とかそういう人が担い手です。そうして彼らはエネルギーがむちゃくちゃあるんですよ。ただ、子どもの理解は、素朴の域を出ていない。学習支援や子ども食堂を旺盛に展開している団体を訪問した際に、発達障害の子ど

ものへの対応に困っているという話がありました。それで内山さんに行ってもらって、発達障害の理解と対応について研修してもらいました。それまで、発達障害の子を叱り飛ばしていたっていう状態だったのが、代表者に次にあった時には、「そういうことだったのか。それまで我々は何も知らなかったです」、「内山さんの話を聞いて、スタッフはえらい変わった」と述べていました。だから、エネルギーがあって一生懸命に活動している人たちと、我々が繋がるって事は、彼らのやってる事のその有効性を高めるって言うことで、大事なことだと思います。

内山：そうなんですか。

村瀬：そうです。スタッフの子どもに対する考え方・理解ですね。そういう意味で我々の存在する意味はあるかなっていう風に思いますね。

内山：大場代表はいかがですか。今のようなお話、先ほどねちょっと少し言いかけてたのが、その小さい頃からなんかしておかないと、例えば若者の問題から手をつけるのは大変だみたいなことをちらっとおっしゃっていたような気がするんですよね。

大場：さっき不登校の人の人数が大体 1400 人くらいって話がありましたけれども。まあ引きこもりの定義って色々ありますけれども、国の一番硬い定義が 0.5%で浜松市のいわゆる 18 歳から 39 歳までの人口 20 万人に当てはめると、大体 1,000 人ぐらいなんですね。私の研究では完全に引きこもっているだけでなくて、日中行くべき場所がある、（例えば、学校とか、ちょっとしたアルバイトとか）でも、そこに５０％以上行けていない、日中の居場所は自宅、他者との会話や SNS が一か月無い、障害福祉手帳取得者や訓練機関に通っている場合は除外する等、条件が重なりから定義を作り直してみると、2.1%国の定義の４倍ぐらいになる。市内の若者人口に割り戻すと 4000 人くらいになる。

　およそ 1000 人の周辺に 3000 人がいるというイメージで、民生委員とか地域側とかすると、がっちりしたひきこもりの人も気になるだろうけれども、周辺のたぶん 3000 人くらいが、ともて将来心配な群として、考えられるのではないかと思います。この人達のメンタルヘルスを調べて共通することは、自己肯定感とか、他者への信頼感が低いっていうことです。多分、こじれてしまっている。背景には、家庭や家族の問題が考えられるわけですけど、乳幼児期の課題だし、学齢期の未解決な課題が沢山ありますね。村瀬さんがおっしゃっていたように、全数を把握できる学校とかね、幼稚園・保育園とかって、ほんとにすごいですね。全員そこを通過しているわけですからね。日本人の全てがね。そんな仕組みがほんとに日本の中にない中で、そういうところとどういう風に協力していくかって大きな課題だなと思っています。さっき大嶋代表が言っていたプランは、初めて聞いた人たちはきっとびっくりするような話かなと思うんですが、どんどん少子化になって核家族化が進み、子どもが育っていく中で、子ども達は正しい姿ばかり求められるとても窮屈な状態にあると思います。社会の隊列から落伍しないように必死になり、緊張感が強くなる。親は社会を見る場合の窓みたいなものですから、いつもそこに不安や緊張があるとしたら大変です。もう少し砕けた言い方をすると、いい加減な大人を見ていないって言うのかな、なんとかなるって社会を見ていないっていうのかな、この辺やっぱりはまだ我々が子どもの時と極めて違ってきちゃったんだろうと思うんですよね。大きな集団とか、地域がある時代だと、いろんな人がいましたのでね。

　いろんなモデルがあっても、いろんな人に声掛けてもらって救われてきた経験が沢山あるので、もう 1 回というか、新しくというかそういう人間が群れで生きていくことをどうやって取り戻すかってことが課題だなっていう風に思いながら聞いていました。オランダのイエナプランについて、ホームページ見たらとても自由な雰囲気で子ども達がディスカッションしたり、意見交換したりしていますよね。人が生きることとか死ぬこととか戦争とか政治のこととかね、教育がどんどんタブーにしていることを、ほんとは子ども達関心あると、そんなこと YouTube をちょっと開ければ情報垂れ流しのわけだから、そういったことは人とコミュニケーションとって、意見言ったり、伝えたりねするってことをできていけると面白いなっていう風に思ったし、その中でまたボランティアとかそういう高尚なことではなくて、自分も苦しかったけど手伝いたいっていう若い人とかね、やんちゃやっていたけれども自分社会に貢献したいなっていう企業の人たちとかね、協力してもらえると良いなと思いましたね。

内山：ありがとうございます。今のところから、何か発信される方いらっしゃいますか。

大嶋：今、大場さんが言った通り、社会で子ども育てるっていうのは、最近やっと言われるようになってて、ちょっと色んなこと勉強したらアロマザリングってもともと昔の原始時代に近いですかね。そういう時には人間っていうのは、やっぱり小集団で住んでて、そして、その小集団の他の女性達がその集団の子供を育てたり、大人たちもみんなで。これが人間の基本で親子が固定してるっていう事はあまりないっていうそういうようなことが書いてあったんですけど。やっぱり実際、だんだん社会こうなってくると、もう離婚したり色々してくちゃくちゃになっているし、そして、しかもやっぱり親子って煮詰まっちゃうので、やっぱり地域全体で見ていくっていうか、昔風なところがやっぱり子どもは育ちやすい社会だった。そして我々やってて思うのは、今、療育とかなんか持ってますけど、療育なんかも、単に昔の子育ての環境をちょっと再現して、いろんな大人がちょっと関わって少し面倒見たり、見守ってあげてたりというような感じで。昔の状況をちょっと再現してあげるだけで子どもって伸びていくので、そういうように今の世の中、反対に言えば今のような学校制度も行き詰っていたり、一対一で親子が煮詰まっていたりするなかで、もう子供達があまり大人を見てない。そして子ども同士の関わりも少ない。やっぱり兄弟とか異年齢。そして、他の家の子供と一緒にいれば、その家こうだけど、家はこうじゃんといろんなことモヤモヤしながらも、でもそんなもんだよねって言って生きていける。いろんなそういう当たり前の社会で生きいく基本が、その集団と言うか全体で見ていく。私も、昔、地域で見ていくとか、地域っていうのがしっかりイメージできなかった時期は、地域といってもどうなんだろうっていう風に思ってたんですけど、地域じゃなくていろんな人が関わって、いろんなことが起きる場であると考えるとすごく分かりやすいし、自分自身も納得できるな。とにかくいろんな人が関われる場面とか、そういうの保障するっていう、そのために我々が動いているんだろうなっていうような。そんな風に発想を持ってくと、今、何か立派なことをやるとか、なんかのシステムがあるとかそんなことよりも、いろんな人がいろんな気持ちで間違ってもいいからいろいろ関わっていく。そん中でワイワイやりながら、やっぱりこうだったよね。さっきの内山先生が、ちょっとフォローしたら、そこの組織がちょっと「はー！」と思ったって言うような。そんなお互い言いながら、本当に子どものことを考えてる人は、色々そこで体験してくので、そんなこうであらねばならんとよりも、どんどんいろんなことが起きていろんな関わりができてくっていうことがやっぱり素敵で。子ども支援 NET もそんな方向に行けばいいなと思いながら見ています。

内山：あ、まとめて下さいました。ありがとうございました。ちょうど一時間経ったところで、あっという間でしたが、子ども支援ネットをこれから浜松市内に展開していく時に、最初は僕らのような専門家が集まって、ああだこうだ話しているっていうことではあるんですけれども、領域は違っても先ほどの話ではないですが、子どもの問題っていうのは色々とつながっているんだってことを僕らは知っているべきだし、それから、子ども中心にものごとを考えていく方がうまくいくんじゃないかっていうようなことだとか、それから、今大嶋代表が言われたように色々な人たちが色々な形で地域っていう枠も取っぱらったような形でいろんな人が関わって、子どもに関わっていくのがいい世界なんじゃないかっていうところで、そういうことを将来、浜松市で実現するために、僕らが少しずつ知恵を絞っていけたらいいんじゃないかなと思っています。

今日は貴重なご意見ありがとうございました。

浜松子ども支援 NET　座談会（第 2 部）

2020，8，31

内山：お集まりいただきましてありがとうございます司会を務めさせていただきます発達相談支援センタールピロの内山です。よろしくお願いします。子ども支援 NET について様々な観点から座談会という形式で、そんな堅苦しくならずに良いかなと思うんですけれども。今回のメンバーの活動領域がバラバラなのでどこに落ち着いていくのが若干不安もありながら話になりますが是非よろしくお願いいたします。まずは、今回メンバー3 人、僕含めると 4 人になるわけですが、それぞれのメンバーの方々から自己紹介と団体の設立の目的や目標ですとか、どういう現状とか課題についてこういう仕事をしようと思ったのかなどお話しいただければと思います。アクティブの浅井さんの方からお願いします。

浅井：アクティブなんですけど、平成 15 年 9 月に発足してかれこれ 17 年経つ会です。発達障害など生きにくさのある子と軽度知的障害の子を持つ親と支援者の会としてやっています。発足当時より、子どものこと学校のこと地域のこと考える行動する解決するというテーマで一生懸命やっています。最初は発達支援学級が拠点校方式だったので地域にないということで地域から我が子が孤立するのを恐れて、地域に発達支援学級設置をと始めたのが 17 年前ですけど、その子達はどんどん成長しまして、今発達支援級から中学卒業の進路先が少なくほとんどの生徒が通信制高校や特別支援学校という選択肢で進路決定をしている現状があります。たとえ全日制高校へ進路希望をしても内申点評価等、入学までに大きな壁があり進学先としての選択を断念してしまいます。今後も発達支援学級の生徒が増加する中で、進路先の多様性を求めていかないと進路先のない進路難民になってしまう恐れがある生徒が増加するため課題として取り組んでいます。あと今後の活動として、こどもって成長しますので成人して将来いきていくための就労とかの支援を、 大人になってもやっぱり支援は必要な子達なのでそういう子達の支援体制整備をやっていきたいなと思っています。

内山：ありがとうございます。

大隅：浜松の未来を育てる会の大隅と申します。よろしくお願いいたします。2008 年に子育て支援をずっと専門にやって来られた高山静子先生(現東洋大学教授)が浜松学院大学にやって来られて、先生から学びたい仲間が集まってはじまりました。

　地域循環式の子育て支援ということで、人材育成支援に取り組みはじめました。子育て支援っていうと「ただ単に子供を、子育てをサポートすればいいじゃない」「親子を楽しませればいい」っていう考えがたくさんあった中で、喜ばせることだけじゃなくて、子育て支援に参加した人がスタッフや地域の人財になっていく支援に共感しました。学んだことを日常で、生活で、地域でつたえることで人材育成支援として循環していくのは魅力です。私たちのスタッフも地域で生活してるわけですから地域の人材となって PTA とか自治会とかそういったところで、地域のこともサポートできるような人に育っていくって素敵ですよね。つながっていくんだって思います。本来子育て支援はそれが主だったんですが、運営によっては固定のメンバーでしていくほうが手間がかからないという現状があります。目指してるものは子育ち、親育ち、関係育ち。当初からしてきましたが、今はそれにプラスして地域育ちですね。地域を含めてのということがここ数年前から入ってきてるかなと思っています。行政さんも“地域丸ごと”ってなってきてますけれども、同じように私達も地域の人と繋がって一緒に子育てしようっていうように意識を変えていきたいと思っていますが、課題でもあります。民間が繋がって情報交換したり、助け合える経験していけたらいいなって思ってるとこです。ありがとうございます。

内山：ありがとうございました。では次に和久田さんお願いします。

和久田：よろしくお願いします。僕はもともと学校の先生を長くしていました。私が所属しているのは、子どもの発達科学研究所という組織です。この研究所は、大学の研究者が学校や子育ての現場に情報を提供したいときに、大学の情報をそのままだと皆さんに分かりにくかったり、専門的すぎちゃったりするため、フィルターを通して分かりやすく提供することを目的としています。それなのでうちの研究所はほかの組織とは違って、浜松はホームグランドの一つとなります。うちの研究所の活動は、大阪でもやっているし、東京でもやるしどちらかというと全国的にいろんなところでやっています。たまたま僕や研究所メンバーの多くが浜松の人だったので

浜松オフィスを構えたっていうことです。今、活動してるのは主には教育現場だとか放課後等デイサービスとかの支援支援者の方への研修支援、いじめや不登校など、様々な子どもの発達上の課題へのアプローチです。それからうちの特長としては、調査研究があります。実際に調査研究をしますし、海外の研究も紹介します。「データ取ってそこからわかることを使いましょうよ」とか「海外でやっているものこっちにもってきましょうよ」みたいなこともよく言います。支援 NET の仲間に入ったのは、自分たちがずっと浜松でやってきた関係上、浜松市の教育委員会だとか内山さんをはじめとする、浜松の支援者の皆さん、そしてアクティブのような保護者の団体などと関係があったからです。浜松って、他の市町に比べても、かなりネットワークもいいですよ。もちろん問題がないわけではないんですが、ほかのところに比べて結構いいんです。それなのでこうした地域ネットワークのモデルが 1 個できて、もちろん浜松が一番うまくいけばいいんだけど、他のところも同じようなことができて、一般化していくことができないかなとは思っています。よろしくお願いします。

内山：ありがとうございます。

内山：ちなみに発達相談支援センタールピロは、平成 20 年に開設された、発達障害者支援センターですね。発達障害がある方、その疑いのある方、関係者などを対象に支援を行うために立ち上がって来ています。 対象者の内訳としては、子どもが 75%ですので子どもが多いわけなんですけれども。25%、つまり 4 人に 1 人は成人期の方の相談でさまざまな年齢層の方に利用していただいてるかなという風に思います。発達障害者支援センターをやっていて思うのはですね、人は発達障害じゃなくて、生活に困っているんだよねっていうところなんですね。その背景にたまたま発達障害があるとか、その疑いがあるということで、相談に来られる方々も入口としては、発達障害とかね、そういうキーワードでやってきますけども、実際にお会いして相談をしていくと、個人の問題だけじゃなくて、家族の問題、家族のサブシステムの問題、環境の問題などさまざま、多岐にわたっているところは常々感じるところです。そういうところで活動しているというところで、結局発達障害の問題って、発達障害っていうキーワードで考えるよりは、人生のそのライフステージごとにそういう課題があるという気がしているところですね。

内山：こんな 4 人でお話をしていきたいと思うところです。今回さまざまな年齢層の方々を対象にした団体の方が集まっているわけですけど、その界隈で課題になっていることで、大隅さん、子育て支援、もっといえば、親への支援はやっぱり大事ってことでしょうか。

大隅：そうですね。結局、保護者さんが連れていらっしゃるので、お子さんのことで困っているお母さんがいればそこに話を聞いてつないでいくとかが多くなりますね。親の支援というところでは。

内山：そこで大隅さんの感触でいいんですけれども、最近の保護者の課題みたいなものを感じることはありますか。

大隅：今、子育て支援ひろばを三つ運営しています。南区と中区と浜北区にありまして、地域色の持っている状況が違うので、理念は同じなんですけど、地域の現状に合わせていくことで来場者しやすくなるという事はあります。
中区の「ここみ広場」の場合は駅から近いところにあるので、転勤族の方が多いです。特に旦那さんの転勤に伴っていらっしゃって、自分の育った環境ではなくて全然知らない人たちところで育児をするっていう、アウェイ育児をしている方が他の地区よりも多いです。
　南区の場合はご近所の方がいらしてくださって、歩いてきましたとか、実家が近くてきましたと言って下さる方が多かったりします。
浜北区の場合は車でしか来れないところなんですけれども、公園があるので、兄弟がいらっしゃる方が来場して下っています。ただ、車がないと来れないので、来たいけど来れない人、必要とされてる人にどうやって届けるかっていうところは、ちょっと課題だなって思いながら、スタッフが知恵を出しながら運営しています。
　子育てに困り感を感じていらっしゃる方には気軽に来ていただきたいなって思っています。浜松市独自の子育て支援であるプラスサポートがあるので、妊娠期の相談があったり、発達の相談ができたり、普通の時でもちょっと聞きたいことが聞ける相談があったり、敷居の低い相談ができる場が増えてきて

います。必要としているお母さんたちは、ちゃんとそこをキャッチしていらっしゃってくださっています。

内山：これもぼやっとした言い方ですけど、最近のお母さん方ってどういうあたりが困っているのでしょうか。例えば、お母さんの地元ではないという意味でアウェイ育児ってことで言えば、孤立ということが関係してくるじゃないですか。どこに住んでいても、孤立していたら子育ってうまくいきにくいっていうかね、お母さんの心理面、精神面でもうまくいかないような気がするんですけれども。最近のお母さんたちの困り事ってどんなことなんでしょうか。

大隅：相談では、離乳食だとかそういった具体的な相談も多いのですが、その背景にある不安などもあるのかなって思います。具体的な相談が多いテーマで講座などをするとたくさんご参加くださいますが、身近で聞ける人がいない、など子育ての状況も影響しているのではないかって思います。
また、「助産師さんがいるよ」とか「専門家と話ができる」という発信が安心できるようですね。産科に行っても聞きたいことが気軽に相談しにくかったり、子どもを連れて行って専門家とゆっくり時間が取れる時間がないので、話をしたいって思って来場してくださる方もいます。頼れる人がいない現状がありそうです。
　子育てって学ばないとできないことなんです。社会で子どもを育てていた時代がありましたよね。そこから核家族化・孤立化になって、今では子育ての様子を見聞きする機会がないまま子育てしている方もいて、本当に子育てを目にした経験がなくて、知らないんですよね。
　子育ては学習しないとできないこと、本能ではできないことなんです。普段の生活の中とか、大家族で生活してる時にちょっと見聞きしたり、自分の妹を世話したりとかっていうことで当たり前に知っていたことが、今は知らないのが当たり前。私たちのスタッフの世代でも知ってるはずと思ってたことが知らなかったっていう話が出たりすることもありますから。本当に世代が変わってきていています。
文化が継承されなくなったって言いますけど、子育ての文化も伝承が難しくなって、全部全く知らない状態で、ネットで調べて、情報が多くなって余計選べなくなっているような気がします。

内山：あーなるほど。

大隅：情報では、検索すると件数の多いサイトが出てきてしまい、子育ての本質的な情報からずれていたりしますから、余計に子育てしにくくなってたりする事もあります。本当にそこが難しいなって思います。なるべく知ってほしいし伝えたいけども、じゃあその伝え方をどういう風にしたらいいのか日々模索しているところです。

内山：文化が分断されると、世代が分断されるっていうことになるわけで、世代が分断すると心理的なつながりが分断されてしまう。さまざまなつながりが分断されて、自分一人だけで生きていかなきゃいけないっていう時に、何も手がかりがないっていう所に結局はいきついてしまって、気がついたら、孤立してるみたいな。そんなことがおきそうで、すごく本質的な議論のように思いますし、子ども支援NETっていうネットワークのかなり中心的な枠組みのような気がして、今お聞きしていました。
和久田さん、例えばそういうことを研究所っていう単位だと何か方策みたいなことはありますか。

和久田：今の話で面白かったのは、それがデータで出ていることです。どこのデータかは忘れてしまいましたが。具体的には、今、子育ての体験が減ったという話がありました。その理由は少子化、核家族化、家庭の密室化とか親の孤立とかいろんなキーワードがあって、それは多分欧米も同じだと考えられますところが、その研究データによると、アメリカなどの場合、ベビーシッター文化があるんですよ。それでアメリカでは中高生がアルバイト感覚で子どもの子育て体験をするんだけど、日本ではそれがないため、若い親に「どこで子育てを学びましたか」って質問するとと「本で読みました」という話になってしまうわけです。いくら本で正しい情報を得たとしても、体験に勝るものはありません。一方、日本でも中学校や高校に赤ちゃんを連れて行って、赤ちゃん抱かしてあげてね、それで命の重みだとか、子供の可愛さって味わうっていうのをやってると聞いたことがあります。そんな風に経験させることが子育て文化伝承のために必要なんだと今の話を聞いて思いました。僕らはどちらかというと、大隅さんたちがやっている活動をバックアップするような組織です。むしろ大隅さんたちが使えそうなリソース（研究や調査など）があったら、それを探して提供

しましょう、みたいな感じになります。実は今、大阪方面にはなるんですが、子育て不安や親のストレスの研究をしようという話が出ています。ストレス尺度（PSI）をやっていただいて、子育て支援を受けている人とそうでない人で、どのくらい差があるのかを調べようということです。そのときの支援なんですが、大隅さんたちがしているような face to face の支援は、今の時代、なかなか難しいかもしれません。コロナの関係で人と人の距離があいてしまったと思います。そのため子育て支援でさえリモートでやりましょうとか、そっちに変わってきていますけど、そのことってどう思いますか？

内山：僕らも今（zoom meeting で）距離が空いてるね。

和久田：そうです、そういうことなんです。ZOOM のヴァーチャル背景なんですけど、こうして見ると、今、宇宙にいる人もいれば森林にいる人もいる。

内山：まぁ、便利な部分は日本中を一気につなげるからね。メリットをうまく使えば便利。

和久田：うちの研究所の場合、コロナ禍の影響で、かなり Web を使うようになりました。その結果、北海道の人とか沖縄の人とか福岡の人とか、高松の人とか、よく知らないところに住んでいる支援者、保護者がつながるようになって面白くなっていますけど、失う物も大きいと思ったり、でも、田舎にいて車がなくてどこもいけない人にとっては、Web で簡単に相談できるからいいかなと思ったり。

内山：そうそう、そういうメリットもあるよね。

和久田：確かに Web のメリットはある。でもネット環境を使えない人は、この結果落ちこぼれていくことになる。それもどうかなって感じ。

内山：スマホうまく使えればいいけどね。
浅井さんこの辺の話題。今は高校からから社会への接続っていうところで頑張っていらっしゃるわけですが、元々はお子さんだって小さかったわけだし、そこで何か課題のあるお子さんを育てていくっていう時にそれなりに苦労したのかなっていうふうにも思うわけなんですが、今大隅さんの話とか和久田さんの話を伺っていて何か感じるところがあれば是非ご意見ください。

浅井：やっぱり現代は情報があふれている。自分達の子どもが幼少期はそんなことなかったんですけれど、とにかく情報を求めたいっていう部分で、私たちは子どもが小さい頃から自分達が出向いて、相手の顔が分かる発信源で、情報を求めていたんですけど、確かに昔はインターネットもちょうど走り、今みたいに情報にあふれていなかったので。今は、情報が溢れすぎてしまっていて、やっぱり、何を信じていいのかがわからないって、それでこの情報がいいのか悪いのかっていう風に保護者が混乱しています。後はやっぱり核家族になっているので孤立した子育てなんですよね。子育て環境が発達障害があろうがなかろうが、そこになおかつ生きにくさをもっている子育てなので、世間にあふれている定型発達の子育てマニュアルや情報を参考にすると、情報と違う成長をする育児に混乱や不安になったり、直ぐに我が子は発達障害と保護者自身が判断したりとかなり大変な子育てになっていてそこでもうお話ができなくなって孤立してしまっている保護者が増えている気がします。情報は溢れているけれども、その情報もさっきいったように、どれが真実なのか正直分からない部分もある、それを顔を見えない情報発信者の言葉を鵜呑みしてしまっている。それでは相談場所があるかって言うと、浜松はある方で自分から積極的に情報を求めて探せば、相談場所を見つけることが出来ますが、見つけることが出来ない方は、相談もできない。だから発信源不明な変な情報を得て不安になってしまっても、相談場所に繋がっていない人は不安に対する解決策が見つからないことがあるあと、相談が上手く出来ない方は学校の先生にも上手く相談出来ない事が多い、そうなると今度学校とトラブルになったりする。アクティブメンバーは情報を集めるのが得意だったので、こういう風にして繋がり活動ができたんですけど、私の周りでも情報を多く集められない保護者が多くいました。どんどん子育てを諦めちゃって「どうせやってもダメ」という感覚で、支援が必要で支援しないといけない子ども達が支援から外れて、そこから２次障害になって、いじめや不登校に繋がり今に至る子たちもいるので。保護者の特性もありやっぱもともと孤立してしまう子育てをしてしまう方もいる。本来情報は大切であるが情報がいっぱいありすぎてしまって何を信じていいのかわからないこともある。

でも不安やパニックになっている保護者がその情報を精査する相談場所がない。そうなっていくと、保護者が孤立して子どもに当たってしまって、子どもと親の関係も悪くなってきてしまい、二次障害にもなっていくと言った悪循環がくるくる回っているというか。なんかもう少し大隅さんがさっき言ったように、生まれる前からの親支援が必要、親も早期からの支援も必要だなと聞きながら感じていたんですけど。

内山：早期支援と言った場合に大隅さん、どこからやればいいのでしょう。

大隅：鶏が先か卵が先かみたいな感じですけど、私たちは子育て期は、親にとっても子どもにとっても大切な時期なんじゃないかと考えています。お子さんを産んだ瞬間というのは、皆さん希望に満ちあふれているのではないでしょうか。これからって思える。この子のためにと思える可能性がある時ですよね。私たちは親子の誕生の喜びに寄り添って、みんなで一緒に子育てできたら思っています。
最初のステップとして思うのは、「1 歳半検診」以前に信頼できる人がいる安心できる居場所があるかどうかという事です。一歳半検診では、いろんな情報と現実を突きつけられりすることがあります。その時のお母さんのダメージは大きくて、そこからすごくマイナスになっていくお母さん達がいる現実を経験しているので、その前に、仮に困っても一人じゃないんだ、話を聴いてくれる人がいて、寄り添う人がいて、安心できる場があることを実感してほしいと思っています。何かあっても、ここに来たらいいよって思ってもらえたら嬉しいですね。
さらに、保護者の方も、その方の経験からいろいろなやり方や癖がありますよね。子供さんにも個性があるので、それぞれがちょうどいいかかわり方が見つかるといいなって思って意識しています。
産前も重要です。妊娠期からのつながる支援ということで、私どもの浜松の未来を育てる会では妊婦支援や産後サポートも行っています。産後サポートでは、お子さんが一歳になるまで市の助成でサポートを受けることができます。産後は、訪問支援を必要としている方もいらっしゃるのでご利用いただいています。
会では「ここみドゥーラ」という産後サポートをする人材の育成と産後サポート支援を行っています。専門的で、丁寧な心に寄り添う支援をしているので、ご希望の方が増えているように思います。「ここもドゥーラ」のメンバーは、専門の研修を受けて、適性がある方がメンバーとなります。薬剤師、看護師、助産師、保健師、保育士、介護士・・・など様々な資格を持った経験者がいます。さらに、スタッフが産後サポートの重要性を実感しているので、子育てに対する気持ちを受け止めて、寄り添って対応していることが、産後の皆さんのお役に立つことにつながっているように思います。
私事ですが、長女は東京での出産でした。パートナーも仕事が忙しく、私も仕事で行けないので不安な初めての産後を助けていただきました。このシステムのお世話になっていましたが、すごくよかったです。施設にも付き添いで行ったんですが、これだけゆったりといい支援が受けられたら、お母さんの体もすごく回復がいいだろうし、気持ち的にもすごく救われるだろうなとは思いました。
先ほど日本は先ほどベビーシッターのっておっしゃってましたけども、その家に他人が入ることを好まない傾向はありますよね。お母さんが、気を使ってお願いできないというケースもあります。お母さんは求めてても、「なんでそんなこと必要なんだ」「なんでご飯の支度とかそういうのを他人にやってもらわなきゃいけないのか」「やっている人もいるのにできないの？」と身近な人からの声が気になる方も、実際に言われた人もいらして、お願いをしたいけれども、お願いできないんだって声を聞いたりもすることがあるんです。
時代、社会が変化していると意識しないと難しいですよね。

内山：惣菜のポテトサラダを買っている女性にポテトサラダは簡単に作れると指摘した人のエピソードが最近話題になっていました。そうするといよいよ母親は追い詰められていくわけですよね。ありがとうございます。
次に話題を浅井さんの方にふりたいと思います。中学から高校にっていう接続の課題について。

浅井：そうですね、今そこがすごくアクティブとしては、支援学級、特に知的がない子達、情緒・コミュニケーションがうまくいかなくて情緒級にいっている子達っていうのは特別支援学校とかに入れないので、本当は全日制なりで試験を受けて入りたいところなんですけど、市教委・県教委からは一応支援級の内申点でも入れることにはなってるんです

が、実際には全日制に入りにくくて、みんな通信制の高校に入っていく子が多いんですね。ただ、私立の通信制ってのはお金もかかってきますので、全員進学出来るのではなく家庭環境においては、諦めざるを得ない子がいて、私たちも中学卒業後の進路先の詳細集計を見たことがありませんが、実際に諦めて知的障害を伴わず特別支援学校に入れない生徒がたちが進学先をあきらめて、どんな進路先を選択したのかその後をどう過ごしているのか私たちも分からないんですけど追跡結果を知りたい。今そういう子がたんぽぽ広場、早期療育っていうことをすごく市でやってくださっているので、私たちの時には、就学時検診の時に発達支援学級に入るのは知的とかで遅れていれば致し方ないというのはあったんですけど。コミュニケーションから二次障害とかあるかもしれないので、先に支援級に入っておいて支援を手厚くしといてから、あとで通常級に戻りましょうっていう感覚で敷居が低くなっているので、支援学級に入っているお子さんが出生率の割にはすごく多いんですよね。それでうまく通常級に復学すればいいんでしょかうが、そのままコミュニケーションの二次障害で手厚く手厚く学校でおこなってくれて中学 3 年まで支援級に在籍していた生徒は、その後行く場所がない。たぶんそういう子たちっていうのが今後増えていくのでそのあたり進路先の選択肢のない部分。あとは、通常級在籍の生徒で本来生きにくさがあって、診断はついてないんでしょうけど、多分発達障害等をもっている子たちもいるとは思うんですよね。そういう子たちも通常学級在籍していたから内申点評価も出来て全日制希望して全日制に進学したりと、全日制高校などいろんなとこ通ってると思うんですけど、それで多分本当は県立しかり、私立しかり、と発達障害の生徒が在籍していて、高校も前面に特別支援教育に取り組んでいますと言っているところが少ないですが、結果的に生徒支援が特別支援教育の環境となっていると思っている。ただあくまでも、通常学級に在籍しているから理解されている節があり、知的障害を伴わない情緒の生徒も支援体制さえあれば情緒の支援学級から進学可能だとは理解されにくい。その説明がどうしても発達障害・支援級っていうと知的っていう風に思われてしまって、そこでもう皆さんに言っても、障害がある子たちは全日制に入れない。情緒は見えない「そうじゃないんだよ」と言いたいんですけど、そこがうまく皆さんに伝えられなくて、 多様性を求めて、その子にあったニーズにあった高校に入りたいってことを伝えたいんですけど、発達支援学級の生徒が受験するってこと事態でもう障害がある子たちが、受験受けるのかとそもそも不登校とかあった子たちが全日制の高校に突然入っても大丈夫なのって言われたりして、理解や支援があればできるはずなのにその辺がなかなか理解してもらえなくて、今すごく難しいなって思ってるうちに私たちの子はどんどん卒業してしまうので更に難しい。課題を声を挙げて活動しているが、気づくともう次の世代になっていて、その辺の伝え方がどうやって伝えていけばいいのか。

内山：どなたに？学校に？

浅井：学校とか、後はやっぱり世間。定型発達の子を育てる保護者は自分たちの子の課題ではなく普通に進学出来るのでなかなかインパクトがない（ブラック校則とか白い下着のみ認めるなど、みんなが疑問に感じることなら）があると世間が注目してくれるんですけど、やっぱりこの話題は、特性があるので世間が注目しない、注目されても、考え方がバラバラすぎてすごく大変な問題です。世間の皆さんに対してどうやって大変さ・課題を突きつけるのか、提示しないといけないのか、そこら辺の難しさもあるなと思っているんですけど。難しくて不完全燃焼な状態になっています。

内山：学校出身の和久田さん何かここで答えられることありますか

和久田：これはね、本来、制度はもう整っているんですよ。実は。

内山：平成 19 年。

和久田：そう。障害者差別解消法の合理的配慮の適用、インクルーシブ教育など文科省の制度から考えると、全部整ってることになっています。しかし、全国的にも今、お話にあったような状況で、浜松はまだいい方かもしれません。なのでこのことは、もっと日本全国で話題になった方がいいと思います。

内山：人権問題だよね。

和久田：そうそう。人権問題です。ちょっと前に特別支援学校の校舎が狭いというニュースが出てまし

たけど、こちらからすると、「こんなこと、今頃、言っているんだ」って話です。もちろんそんな風に政治が動くとばーっと整備が進むからいいんですけど。結局、お金のかけ方の問題なんですよね。先生たちの意識ももちろんそうなんだけど、せっかく法律作ったけど、「作ったからいいでしょう」になっちゃってるから、そこを大きな運動を起こしていく必要があります。例えば YouTuber になって、動きを起こすのはどうでしょう。浅井さん YouTuber になりましょうよ。

浅井：私、精神的に弱いので。

内山：でも調べるといるかもね。そういう教育制度について語っているような。

和久田：YouTuber は極端かもしれないですけど。

内山：いや、ありあり（笑い）。

和久田：やっぱり発信力が必要だと思います。

浅井：親がわがままっていう風に、国側ですかね、わがままにとらえちゃうっていうか、世間のみんな我慢しているんだから、なんであなたたちだけみたいな。 うまく説明できないんですけど。

内山：要求が多いみたいな感じだよね。

浅井：そう。親だとモンペとか。そうじゃないんだけど。最終的に疲れちゃって、我慢すればいいのかな親がって人が多いです。あぁあと 3 年待てばとかって。

和久田：情報を集めてみると、大学のほうがまだいいみたい。相手が大学生という大人なのでリスペクトされているんじゃないかと思います。日本って発達障害に限らず、子どもの人権について、十分ではないかと思いますよ。やっぱり親の中にも発達特性があったり、傷つき体験があったりするもんだから、全盛期の昭和の教育の積み残しみたいな部分があってきちゃって。自分でも感じるもん、自分の親からの支配だとか、子ども時代のいろんなトラウマみたいなのを感じるから、それを今清算して整理するのは時間がかかるんだなって。時間かかるんじゃ困るんだよ。困るんだけど、よく考えると、ちょっとずつちょっとずつ進んでる部分があるので、そこをね、諦めないでやり続けるしかないんだけど。

うちの研究所の立場としては、浅井さんがいっているようなことや、大隅さんがいる子育て現場のいろいろものを、数字で出しましょうっていうことです。一人が言っている意見ではなくて、それを社会に説得できるように、データでしっかり出していきましょうというのが、うちの研究所の役割です。ここまでお話に出ているような子育ての状況や親の意識について、浅井さんや大隅さんがおしゃっている仮説を証明していこうということです。ただし、調査研究ってお金がかかりますので、そこがネックではあるんですけど。

内山：和久田さん、今バックアップみたいなことを言ってるわけだけれど、和久田さん自身の子供の支援に関する課題意識っていうものはお持ちなんでしょうか。

和久田：私の場合、「教育」がテーマです。学校がいいと、子どもと親を守るんだけど、逆に傷つけているところがあるので、そこをなんとかしないといけません。例えば、不登校です。文科省のデータだと 11 万人・12 万人ぐらいですけど、日本財団が不登校の定義をゆるめて調べたら、44 万人という数字が出てしまってます。これは NHK の特集にもなったぐらいなんですが。ただし、それがコロナの前の状況です。このコロナ禍、学校って行かなくてもいいんじゃんって気づいた子がたくさんいると思うんですよね。行ってもつまらないし、家にいると勉強が遅れるって思っていたけど、そうでもない、家でも何とかなるんだと気づいてしまった。そういう意味で、実は、今、義務教育って崩壊の危機だと思う。そうなってしまった理由を考えると、特別支援の子どもが増えたっていうより、学校が今の子供の発達にあってないもんだから、そういう子を増やしちゃってる可能性があると考えます。つまり子どもの発達がどうのではなく、学校側の問題だと思います。そんな状況ですので、学校が 21 世紀に合ったものに変わっていけるようなデータを出したり先進事例を紹介したりできるといいと思っています。発達に障害がある子どもだけが対象じゃないです。全ての子どもが特別ですから、どの子も居心地がいいような 21 世紀型の教育を考えるべきだと思うんです。

浅井：今、和久田先生のハッと思ったけど。時代はいろいろ変わっているのに、私が通っていいた時代の頃の学校と今私が学校へ入って違和感がないってことは、おかしいってことですよね。

和久田：別にそのことを悪いと言うわけじゃないですけど未だに学校では逆上がりとか必死にやらせていて、未だに 30 分間回泳（浜松市の場合）があってと、変わっていないことが多いですよ。例えば、掃除機が自動で動く時代に、今更三角巾かけて雑巾がけをするのは時代錯誤じゃないかと。それはそれでいいのかもしれないけど、本来、変わらなければならないことが変わっていないんではないかと思うんですよ。

内山：21 世紀型を考える時にちょっと思ったのは、前回の座談会(第 1 部)で、子どもの社会的養育の話題が出たときに、コロナ関係で、学校が休みになったら虐待とか、そういうのが隠れてしまったっていうようなこともあって、家で何が起きているかより分からなくなった。だから学校っていうのは、ある種の子どもたちにとっては役に立っている部分があると。そういう論調もあったわけなんだけど、21 世紀型でどの子も対応できる学校っていう風になった時に、何かアイディアありますか。

和久田：アイディアはあるんだけど、たぶん今の制度だと実現不可能だと思うんです。日本の場合、まず、教育についての選択肢が増えればいいと思う。今の日本の学校教育が好きだって人はそれを選べばいいと思うし、それ以外がいいと思う人はそれ以外を選べるように。現状、日本の場合、北海道から沖縄まで、学習指導要領の縛りがかなりすごいんです。例えばコロナ禍で授業数が足りないとか言ってますけど実際には学習指導要領とか学校教育法施行規則とかに書いてあるからやらなきゃいけないだけであって、もっと何とかなるはずなんです。ところが、やらなきゃいけないって縛りがすごい。もっと規制緩和すればいい話（実際にされてきていますが）なんですよね。

　もっと教育の内容、量、枠組みについていろんな選択肢があって、我が子に合わせて選ぶことができるのがいい。新しくどの子にもフィットするっていうを作るのはちょっと難しいので、いろんな価値観があるもんで色々選べるっていうふうになって行くのがいいんじゃないかなって思ってます。

浅井：ほんとにそう思います。

内山：でも大きなテーマとしてはやっぱり、子育て支援っていうのは、子育ては学習だっていうのはね、改めて気づかされた大きなテーマだなと思って聞いていました。そもそも乱暴な言い方かもしれないけど、昔の子育てって別に親が子どもを育ててなくてじいじばあばが育ててる。なぜかと言うと、若い世代の働き手が働く必要があるから。なので、地域であったり、じぃじばぁばが育ててたっていうのが日本の子育ての根本にあったんじゃないかと思うんですよね。そういう中で、子どもたちが育っていくとか、子ども達も育てられることで育て方のノウハウを知っていくなんてことがあったんじゃないかと思います。だから子育てっていうのは学習だっていうのはなるほどなって思ってお聞きしていました。それはやっぱり子ども支援ネットにとっては大きなテーマのような気がしています。子ども支援 NET は単なるネットワークっていうことだけだと、ネットワークになりましたね。みんな仲間ですね、ぱちぱちで終わってしまう。でも僕らはやっぱり、さっきの和久田さんの言葉を借りれば、21 世紀型のネットワークも一方では考える必要もある。単純に人が寄り集まってよかったね、ではなくて、子どもにかかわる人たち、様々な領域があるわけだけど、その 1 つ 1 つがどれも大事なことであって、みんな一生懸命頑張っていると。だけど、その領域だけで頑張っているだけでは、なかなか形にならないっていうところを、今回、子ども支援 NET で何か形にできないかなってところを考え出しているってわけなんですよね。そういうところで、子ども支援 NET って子どもにまつわるさまざまな課題のポストみたいな役割をとってもいいのだと思うし、ポスティングされた課題に対して、中にいる人たちがどんな回答を出していくか、なんてことを繰り広げていくのも一つの手なのかな、なんて思いながら、それをどう形にしていくかっていうことに思いを馳せていました。
これからの子ども支援ネットに期待するところをお聞かせいただければと思いますが。大隅さんからいかがでしょうか。

大隅：ありがとうございます。期待するところというよりも、今日の話を聞かせて頂くだけでも、すごく考えが広がります。どうしても自分の分野の人たちと話をするということが多いんですね。それに自

分の分野の方でもやっぱり同じように考えてらっしゃる方とそうでない方といたりしますので、同じ心 z 氏を持って子供たちを支援していこう、いろんな世代を超えて支援していこうって人たちと繋がれたったことはとても心強いなって思います。子育ての支援、 0・1・2 歳、妊娠期からつながる支援の一番最初のところで、私たちがいますけれども、そこに期待されることとか、それからこんなこともあるんじゃないかとか、いろんなご意見をうかがうことができる場になったら嬉しいなと思っています。

内山：ありがとうございます。浅井さんはいかがでしょうか。

浅井：大隅さんと同じようにどうしても発達障害とか、特別な保護者って部分があって、なかなか声が上げれない部分があったりするんですけど。今日みたいにいろんな方のお話を聞くことによって、違う角度から自分たちが歩み寄らないといけない部分もあるんだっていろんなことを学べるってことで、いろんな方の、それぞれの立場にあった意見を聞けるってことは、私たちにとっても活動においてもすごくいいことだなって思う部分と、
どうしても親であると、今を生きている子どもしか見てないんですけど、やはり生まれた時の幼少期のことがあってここにつながっている。もっと言うと、なかなか今は大人の生きにくさのある方の団体がないですけど、成人期になった時に生きにくさがあった人たちの団体があれば、その先のことが見れる。なかなかライフステージの表図ありますけど、その体験談、先のこと聞けるって人たちがいないので。こういうことがあった、ああいうことがあったよとかって部分と、結局最終的に自分たちの子が親になった場合に、また大隅さんのところに戻るわけですよね、親となって。その時に、私たちの子のことを考えると、やはりちょっと生きにくさがあって、孤立してしまう子育ての可能性もあるので、そこを常にクルクル回っているので、いろんな人たちとつながって、先を見たり、過去を振り返ったりしながら子育てをしていく。それでやっぱ和久田先生が言ったように制度ができていても、使う人が声をあげないと声にならないと一緒で、制度として声を上げていくようなそういう風にしていくような支援 NET であってほしいなと思います。

内山：ありがとうございました。和久田はいかがですか。

和久田：良かったです。これは他の地域の話になりますけど、普通、医療は医療、親の会は親の会、先生は先生たちとか、それぞれでまとまっていて、互いの乗り入れは、こんな風に簡単にできないです。その点、浜松はいい意味でゆるいですよ。なのでそういう風につながるのが良かったなと心から思いました。こういうことは係分担です。全部のことを自分たちのところだけでできないので、いろんなところがゆるく集まるのはすごく価値があると思います。

内山：ありがとうございました。

僕なんかは、あるテーマ、例えば子育て支援について子ども支援 NET を使って、そういうもの興味がある人集まれ、WEB ミーティングしましょうよとか、そうしたゆるいけど、いろんな人たちが気軽に参加できるような仕組みを作るのも支援 NET らしくていいかな。この ZOOM とかでね。

和久田：こういうのね、「サロン」「WEB サロン」っていうらしいです。

内山：僕の思いはサロンってことだったようです。いろんな可能性が秘めているとはいえ、単なる集まりではないようにしたいなって思いがあって、今後もそういうことは模索しながら進んでいきたいと思います。